

## 新しくなった共通教育の英語

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 皆島, 博 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/8107">http://hdl.handle.net/10098/8107</a>

# 新しくなった共通教育の英語

第2(外国語)部会長 教育地域科学部 人間文化講座 皆島 博

## 1. はじめに

共通教育外国語科目(英語)(以後、共通教育英語)では、本年度入学の工学部1年生より、新しいカリキュラムでの授業が始まりました。本年度は、工学部新入生だけの先行実施となりましたが、来年度には、教育地域科学部生も工学部生とほぼ同じ内容の授業を受けることになると思われます。そこで小稿では、昨年度より今回の共通教育英語改革に立ち会って来た者の立場から、今回の改革の経緯と中身についてご紹介したいと思います。

## 2. 共通教育英語改革の背景

主に経済活動の世界で、グローバル化、ボーダレス化などと叫ばれて久しいのですが、日本の英語教育の世界でもその潮流を受けて「実用か? 教養か?」の古い議論を持ち出すまでもなく、その流れは実用主義へと大きく傾きました。福井大学における英語教育もこのような流れに対応せざるを得なくなりました。このような中、2006年に、1年生を対象として、文京キャンパスで試行的に実施された学内TOEIC(TOEIC IP)で、大方の学生の英語力が不十分であることが判明しました。これを受けて、英語教育の充実を目標の一つとして掲げた語学センターが大学主導で設立されました。その後、高等教育推進センターの旗振りの下、共通教育検討委員会が設置され、その下部委員会として2012年に英語教育検討専門委員会が発足し、語学センターと共通教育センターの協力の下で、共通教育英語改革の骨子をまとめ上げました。今回の改革は、出発点としては、大学に対する社会の要請を受けてのものでしたが、さらに本学が平成24年度文部科学省「グローバル人材育成推進事業(特色型)」に採択されたことも今回の改革を後押しする一因となりました。

## 3. 共通教育英語改革の骨子

今回の共通教育英語改革における主なポイントと変更点は次の3点に整理されます:

- (1) 授業時間(コマ数)の倍増
- (2) 習熟度(能力)別クラスの導入
- (3) 少人数クラスでの授業実施

まず、(1)について、改革前の学生は前期と後期に週1コマずつ(2年間で4コマ)英語を履修することが求めら

れていましたが、前期と後期に週2コマずつ(2年間で8コマ)履修することになりました。次に、(2)について、改革前の学生は、所属する学部、学科、コース、学籍番号に応じて、機械的に振り分けられたクラスで英語を履修していました。今回の改革では、入学時にTOEICを受験してもらい、そのスコアに応じて4レベルのクラスに振り分けられることになりましたが、TOEICスコアだけでなく、GSLという一種の語彙能力テストの結果も同時に勘案されます。最後に、(3)については、改革前にも1クラスの学生数の上限を40名以内に抑えるという方針が導入されていましたが、今回の改革では、1クラスあたりの学生数は、だいたい20数名程度に抑えられています。

改革前の共通教育英語では、2年間で履修する4コマを「TOEIC/TOEFL入門」「読解」「リスニング」「総合英語」の4つのカテゴリーに分けたこと以外、教科書選定や授業内容等の細部については、各担当教員の自由裁量に委ねられた部分が多くなっていました。しかし、今回の改革では、語学センターが中心となって選定した統一教科書の使用、英語によるディスカッションやスピーチも取り入れた、実践的でコミュニケーションが盛り込まれています。さらに、eラーニングのシステムの導入により、学生の教室外学習も奨励することになりました。成績評価についても統一基準の導入が検討されました。

## 4. おわりに

冒頭で紹介したように、本年度から工学部新入生が新しいカリキュラムでの英語の履修を始めました。教育地域科学部でも、慎重な検討を重ねてきた結果、新しい英語のカリキュラムを実施することになりました。本学では、共通教育センター発足以来、十数年ぶりの共通教育英語改革となります。今回の改革は、他大学でもすでに実践されている内容を含んでおり、必ずしも斬新で目新しい提案ばかりがなされているわけではありませんが、グローバル指向、実学指向という社会の要請に応えるべく、英語教育を抜本的に強化することを目標とした改革ということができると思います。文京キャンパスの学生の到達目標の中にはTOEICの平均点の底上げも含まれており、今後どのような教育効果が出て来るのか、その成果が問われるところです。